

# 巻 頭 言

神戸大学大学院理学研究科 野海正俊

## 論文雑誌のこと

先日の日本数学会年会の初日に開催された数学出版のワークショップで聞いたことだが、外国のある有名な論文雑誌の場合、掲載論文の 90%が、既にプレプリント・アーカイブで公開された論文だということである。雑誌によっては、プレプリント・アーカイブで予め公開していることが投稿のための必須条件で、論文の投稿はアーカイブの番号を通知することで行うというものもあり、その場合は 100%ということになる。

一方で、プレプリントをアーカイブで公開することを敢えてしない研究者が一定数いるのも事実である。剽窃や先取権の問題は、結局のところ藪の中で、他者が客観的な判断を下すのが難しいことも多い。そのような微妙な問題に関わりたくなければ、論文が受理されるまでは、プレプリントの公開や口頭発表はしないという判断もあり得る。とはいえ、少なくとも数学に関連する分野では、紙媒体であれ電子媒体であれ、論文雑誌の役割としては、最新の結果の速報的意味合いは薄れて、一定の審査を経た研究結果を蓄積することの方に重心が移動していると、多くの研究者が感じていると思う。

通常レベルが高いと思われる論文雑誌ほど、クリック数が少ないということも起きるらしい。いい論文雑誌に出るような論文は、その分野の研究者はプレプリント・アーカイブの段階で既に読んで知っているので、出版直後に敢えて雑誌掲載版を見る需要は少ないということであろう。図書館側としては、出版後の一定期間、1論文当りのクリック数を比べて雑誌の必要度の指標とし、その値の小さい雑誌から購読を中止するというようなことが、普通に行われているらしい。内容とは関係ない数値を判断規準にすることは、今の世の中至る所で行われているのだから驚くに値しないとしても、「必要な論文雑誌は一所懸命クリックしましょう」などと言い出す人が現われると、笑えない話である。

内容と無関係な数値の最たるものが、論文の引用度数である。引用度数は、個々の論文の内容は見ないで論文の参照関係だけをデータ化し、論文の価値と関係のあるかのような数値を作り出す仕組みである。余り細かい議論をしたくはないが、引用度数を重視する人にとっては、このような指標で個々の研究者や論文雑誌の質を判断できるかどうかなど、恐らくどうでもいいことなのだ。要は、政策決定や商業的利益のために利用できる指標があればそれでよい。このような観点では、参照関係で組み上げた巨大なグラフが、例えば自然科学そのものであり、研究者は矢印の始点と終点を指定するノードに過ぎない。研究者や論文雑誌に関わる者としては、このような本質的でない指標に振り回されないことが肝要であると思う。

筆者は現在、数学の論文雑誌 Funkcialaj Ekvacioj (略称 FE) の編集長を務めている。こ

の雑誌は、1958年4月に福原満洲雄、南雲道夫、佐藤徳意の3氏によって創刊された欧文の「函数方程式」の雑誌である。現在は日本数学会函数方程式論分科会と神戸大学数学教室が共同で編集・出版しており、2012年は第55巻、毎年3号で20数編の論文を掲載している。雑誌名はエスペラントで「フクツィアーライ・エクヴァツィーオイ」と発音する。2003年8月に前任の宮川鉄朗氏から編集長を引き継いだので、間もなく9年になる。当時は、論文の投稿も郵送、査読依頼も郵送が普通だったが、その後、投稿を含めて著者や査読者とのやり取りの殆ど全てが電子メールになった。今は、冊子体とは別に、創刊以来の全ての巻が神戸大学にあるFEのホームページでも閲覧できる。雑誌の編集に携わっている者の一人として、もう少し論文雑誌について感じていることを述べてみたい。

論文雑誌を維持することには様々な課題がある。雑誌の編集者の仕事は、著者、査読者、編集委員の間のいわば交通整理である。このような仕事は時間と労力を要するので、それに価値を認め、それなりに情熱を傾けることの出来る人がいなければ、論文雑誌を維持することは難しい。雑誌の質を維持するために留意すべき点はいろいろあると思うが、何はともあれ、(1) 個々の投稿論文に対して、適切な査読者を選定できること、(2) 全編集委員が、どのような(レベルの)論文が掲載されているかを把握していること、の2点は重要であると思う。

論文雑誌を発行するのに必要な経費は、雑誌の規模(年間の総ページ数や発行部数)にもよるが、人件費は別にして年間500万円程度というのが目安である。冊子体の雑誌は、従来交換雑誌の原資としても使われてきた。交換雑誌というのは、研究機関Aが出版しているX誌と、研究機関Bが出版しているY誌を、それぞれが相手機関の雑誌を購入する代わりに、協定に基づいて相互に無償で提供し合う仕組みである。一時期に比べて数は減少したものの、交換雑誌は依然として論文雑誌を維持するための重要な要素である。

冊子体の論文雑誌の販売については、雑誌毎に様々な事情があるので一概にどうするのが良いと言うのは難しい。しかし、ある大学の数学教室で発行している雑誌のように、冊子体の論文雑誌を、販売するのではなく、国内外の研究機関に無償で配布するのは、一つの合理的で、理想的な方法であると、最近を考えるようになった。但しそのためには、実験系なら実験装置が必要であるのと同様に、数学においては論文雑誌の発行が研究のための基盤的投資として必要不可欠であること、研究活動の一環として学問への重要な貢献であることについて、周辺の理解を得ることも必要である。

論文雑誌の経費を削減するためにも、紙媒体の雑誌の発行は廃止して、電子媒体だけにせよという意見がある。筆者は旧世代の人間ということかもしれないが、この考え方には賛同しない。冊子体であれば、数学教室の図書室で保管し、19世紀の論文雑誌であっても、世代を超えて閲覧に供することができる。電子媒体の雑誌でも、個々の数学図書室で同様のことができるのか疑問を感じる。一定の審査を経た研究結果を蓄積するのが使命であればなおさら、紙媒体の論文雑誌は、紙媒体の図書と同様、必要な投資をして維持すべきだと思う。